

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00278

研究課題名(和文) 医学論・生命論の日本主義的展開：戦時期日本の生理学、臨床医学、漢方医学の連携

研究課題名(英文) Japanistic Development of Discussions on Life and Medicine

研究代表者

愼 蒼健 (SHIN, Chang-Geon)

東京理科大学・教養教育研究院葛飾キャンパス教養部・教授

研究者番号：50366431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：1935年に設立された日本医学研究会に結集したのは、生理学者、臨床医学者、漢方医学者の集団であった。その求心力は、次の3つの考えであった。往復運動体としての「学と術」、生理学と漢方医術の共通性としての「生命の全機性」、西洋医学と東洋医術の統一体としての日本医学。日本主義的医学運動の参加した生理学者の拠点は東京帝国大学と東京慈恵会医科大学であった。彼らは1923年に始まった慶應大学と京都帝国大学の神経生理学論争において両者と距離を置き、東京帝大、慈恵医大、京城帝大は、「悉無律」自体を疑念視する「第三極」の立場を形成した。ただし、京城帝大は実験と科学的推論を重視する「科学主義」の立場を堅持した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一つ目の学術的意義は、日本医学運動成立の歴史的背景にある多線的合流を解明したことである。東京帝大を中心とする生理学者の生命論・思想的活動、臨床薬理学・治療学を研究する臨床医学者の医学論、そして漢方医学復興論以降の漢方医学者の医学論が接点を明らかにした。二つ目は、従来全く検討されてこなかった1923年以降に展開された神経生理学論争と日本主義的医学運動の関係を「悉無律」をめぐる議論という観点から明らかにしたことである。さらに、戦後の体力医学と日本医学運動の関係を人的側面から解明し、思想的側面から示唆している。

研究成果の概要(英文)：A group of physiologists, clinical physicians, and Kampo medicine practitioners came together in the Society of Nippon-Igaku, founded in 1935. The ideas that became its centripetal force were as follows; "Gaku and Jutsu" ("basic and clinical") as a reciprocal movement, "the Zenki of life" as the commonality between physiology and Kampo medicine, and Nippon-Igaku as the unification of Western and Oriental medicine. The bases of physiologists who participated in the Japanist movement were Tokyo Imperial University and Tokyo Jikei University. They distanced themselves from both in the neurophysiological debate between Keio University and Kyoto Imperial University that began in 1923, and Tokyo Imperial University, Tokyo Jikei University, and Keijo Imperial University formed a "third-party" position that regarded "All or None Law" itself with suspicion.

研究分野：科学史

キーワード：医学史

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 学術的背景

現在でも、西洋医学者・医師と漢方医たちとの間には、緊張と対立がありながらも、一方では協力関係が築かれている。この協力関係は1920年代以降、薬物学者・薬学者と漢方医を中心に築かれてきたが、1930年代中盤になると、その担い手(協力者)が拡張していく。その一つの大きなグループは、東京帝国大学生理学第二講座教授・橋田邦彦(1882-1945)を中心とする生理学者集団であり、もう一つの小さなグループは東京帝国大学第一内科講師・板倉武(1888-1958)を中心とする臨床医学者集団であった。この二つのグループに、従来から漢方医学に関心を示してきた薬理学者たち(慶應義塾大学、満州医科大学)が加わり、1935年に「日本医学研究会」が設立され、生命論・医学論の日本主義化は加速化した。

科学論・生命論の日本主義化への関心は、近年高まっており、とりわけ日本主義的科学論の代表的論客と見なされている橋田邦彦に焦点が当てられてきた。思想史分野では、金森修(1)「橋田邦彦の生動と隘路」(1997)を近年の嚆矢として、末木文美士(2)「科学/国家/道元:橋田邦彦と『正法眼蔵』」(2018)がより道元の思想に立ち入りながら橋田論を展開した。科学史分野からは、岡本拓司が橋田を「官許の科学論」として読み解いている(3)「戦う帝国の科学論」(2018)。さらに医学史分野からは、勝井恵子が従来の個別化された橋田邦彦研究に対して、その全体像を理解しようと彼の思想的基礎から読み解く研究を進めている(4)「橋田邦彦における「医」の三要素」(2010)、(5)「橋田邦彦研究:ある「葬られた思想家」の生涯と思想」(2010)、(6)「「医人」・「医行」・「格医」:橋田邦彦の「医」の思想」(2016)。

### (2) 問い

本研究は、1930年代中盤まで西洋医学に対抗する統一戦線を組んだ経験がなかった、生理学者・臨床医学者・漢方医の三者が、「日本医学」建設を目指した動きに着目する。この「日本医学」という言葉は、1935年前後に登場し、1945年以降は消えていく。

なぜ、このような運動が歴史的に成立したのだろうか。これが本研究の最初の問いである。そして、この問題を考察するためには「前史」に遡及して、歴史的背景を探求する必要がある。応募者は、「日本医学」運動の歴史的背景として、次の三つの流れを検討する。(A)〈永井と橋田のライン、そして周辺にいた東京の生理学者たちの生命論を中心とする思想的活動〉、(B)〈臨床薬理学そして治療学の研究を進めてきた臨床医学者たちの医学論〉、(C)〈漢方医学復興へ向け活動を展開してきた漢方医たちの医学論〉。この三つを主として1920年代以降から追跡し、どのような歴史的背景があったのかを検討する。さらに、(A)、(B)、(C)の合流を促した要因はなんだったのかという問題へと進むため、(A)からは橋田邦彦、(B)からは板倉武、(C)からは大塚敬節、この3人の思想的接点を探っていく。

もう一つの問いは、この運動の歴史的な性格をどう解釈するのかという問題である。応募者は暫定的に「日本主義」と評したが、国家主義あるいは国粋主義といった評価との異同について検討する必要がある。この問題を考察するためには、「日本医学」運動をより大きなコンテクストに置く必要があり、本研究では日本医学運動に参加しなかった生理学者、漢方医たちの生命論・医学論とく近接領域にある科学論を組上に載せる。後者は岡本拓司らの研究を参考にし、前者は京都帝国大学生理学教室「国民生理学会」の「国民医学(後に健民医学)」運動と植民地の生理学者たちの動向、そして漢方医たちの積極的な言論活動を取り上げ、彼らの生命論・医学論だけでなく、日本主義・国家主義・国民主義などの意味を歴史的に検討する。さらに時間軸を延長して、「日本医学」運動に参加した生理学者・臨床医学者・漢方医たちの動向を1950年代まで追跡し、敗戦前後の生命論・医学論の断絶と連続性を読解することで、戦時期「日本医学」運動の性格を検討する。

## 2. 研究の目的

「戦時期」日本における医学論・生命論の日本主義的展開を、戦時期「以前」および「敗戦後」との断絶・接続も含めて、歴史的に解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

3年間を通じて、必要に応じて本研究に関連する基礎文献や公刊資料を購入し、先行研究を整理しながら、問題点をブラッシュアップしていく。それと同時に、本研究では先行研究にて利用されてきた一次資料だけでなく、あまり利用されてこなかった一次資料の調査を重視する。国内では、東京と京都が中心となるが、『生理学餘外集』(生理学雑談会、慶大)、『日本医学』(日本医学研究会)、『治療学雑誌』(板倉武主宰)、『生理学研究』・『国民医学』・『健民医学』(京都帝大)など基礎的な重要文献など、全号が揃っている機関はなく、旧帝大はもちろんのこと、金沢や岡山など旧医大の図書館で調査する予定である。本研究では問題の性格上、外国での調査も不可欠である。神経生理学論争に加わった京城帝大医学部生理学教室の資料、慶大で学位を取得した朝鮮人生理学者(李甲洙・京城帝大講師)の資料も収集するため、韓国での資料調査を行う。

## 4. 研究成果

## (1) 日本医学研究会成立の背景

Japanese Medicine ではなく、Nippon-Igaku を掲げた研究会は、西洋医学と漢方医学の研究者および医師を糾合した日本初の活動的研究会であり、1935年11月3日に設立された。研究会の目的は、一言で言えば、「学術道一如」の日本医学の建設である。極めて抽象的だが、この言葉自体が橋田のものである。この成立背景を、生理学と漢方医学の二つに分けて、整理をしてみたい。

日本における生理学会の制度化は、1922年の第1回大日本生理学会がその第1歩だと言われている。主催校は東大、幹事は永井と橋田であった。しかし、学会には機関紙がなかったため、1934年に若手生理学者が中心となり「生理学雑談会」を作り、『生理学餘外集』を刊行した。廃刊まで事務所は慶應義塾大学医学部生理学教室、編集は内山孝一（東大）と林謙が担当した。この書名は橋田が名付け、彼は毎号健筆をふるった。橋田によれば、「人を識らんと欲せば餘外を見るに如くはなし」<sup>1</sup>。橋田がこの雑談会の支柱であることは間違いなく、この雑誌の編集人であった内山は『日本医学』でも編集を務め、浦本政三郎や橋田門下の杉靖三郎、馬場和光をはじめとする生理学者は引き続き、日本医学運動を担っていった。生理学雑誌の必要性を訴える論や各大学生理学教室の情報交換はもちろんのこと、橋田を中心として、人間の生を把握するには自然科学の「不備」を認識し、その「外」へ出る必要性和その見方が論じられたのである。

日本の漢方医学は明治期に一旦は衰退するが、1910年に刊行された和田啓十郎『醫界の鐵椎』が一つの契機となり、1920年代の「昭和」の時代に入ると、中山忠直や湯本求真たちによって漢方医学復興論が発表される。しかし、このような復興論が復興運動として大きな流れを形成するのは1930年代中盤である。1934年、長年の慣習を破り、古方派、折衷派、後世派の各学派が協力して、「漢方医学の研究を目的とする」日本漢方医学会を設立させた<sup>2</sup>。日本漢方医学会の幹事の多くが日本医学研究会の役員に名を連ねている。田中吉左衛門と森田幸門は評議員、安西安周は理事長、鍼灸師の柳谷素霊と木村長久は理事として、日本医学研究会に参加していった。

両者の間には自然科学的医学への批判と新たな日本の医学への展望が共有されていたのである。その思想的支柱として橋田邦彦（後に会長）が、臨床医として板倉武（後に副会長）が、日本医学研究会の顔として、生理学者と漢方医を糾合したのであった。

## (2) 橋田と板倉の思想的交差点、そして日本医学へ

### ① 往復運動体としての学と術、基礎と臨床

橋田と板倉は、対比的な言葉をしばしば援用した。橋田の言葉を借りれば、「学」と「術」、あるいは「抽象」と「具体」。板倉の言葉を借りれば、「理論」と「実際」、あるいは「基礎」と「臨床」。橋田は<学＝基礎、術＝応用>という単純な考え方に批判的であり、むしろその逆を主張する。板倉によれば、「薬理学の基礎が臨床」であり、その両者の往復運動こそが医学であると考えていた。二人は日本の現状に対しても、学に偏り、医本来の術が軽視されていると批判する。必要なのは「往復運動」。橋田によれば、「具体的な、例えば生命現象から、それを科学者が取り扱って、生命現象に関する科学、あるいは生物学、あるいは生理学というものが作り上げられてくるのでありますが、その作り上げられた科学、即ち具体から抽象されたものは、科学者の働きとして、さらに生命現象そのものの把握として、具体的なものへ立ち返ってくる」<sup>3</sup>。

### ② 生理学と漢方医術の共通性：「生命の全機性」

橋田は生理学者として生命の全体論的立場を支持しながらも、その「静的」側面に納得できず、仏教思想とくに道元の研究を通じて、「全機性」というアイデアを提示する。橋田によれば、生理学は自然科学だが、橋田の生理学とは、「生きているものを生きているものとして取り扱う」学問のことである。そして、生命とは、「変じて変ぜざるもの」「時々刻々動いて少しも停滞することのない活動」。つまり、これが生命の「全機性」と呼ばれる<sup>4</sup>。一方、医とは、全機の立場において実現されている「術」である。術だからこそ学を要求する。医とは疾病の治療、疾病とは異常な生命、治療とは異常な生命を清浄なるものに復帰させること。異常を知るためには正常を知らなければならない。「漢方医術というものも、東洋において発達したものであるが故にあくまで全機の把握ということとその立場としていたのでありまして、この点に於て吾々は大いに学ばなければならないものであると考えます」<sup>5</sup>。生理学と漢方医術は「生命の全機性」という立場を共有している。しかし、漢方医術の具体的運用には「科学性」が必要である。つまり、術から学への運動が必要となる。これを臨床医として実現しようとしたのが、板倉武であった。

### ③ 西洋医学と東洋医術の統一から日本医学へ

1920年代の漢方復興運動以来、漢方医学側では西洋医学と東洋医学の比較論が流行し、相互の長所を生かした東西医学統一論が出現する。しかし、彼らから「日本医学」という言葉は生まれなかった。この言葉を肯定的に使用し始めたのは、橋田邦彦であった。その内容は東西医学の統一だが、漢方医たちの統一論に対して、橋田は次のように考えていた。「所謂長所を集めて集大成するということは勿論大切な働きであります、私は東西新古の長所を探り集め大成したものだけが決して「日本医学」だという訳にはいかないと思うのであります」。さらに、この程

<sup>1</sup> 橋田邦彦「創刊の辞」『生理学餘外集』生理学雑談会、創刊号、1934年、1頁。

<sup>2</sup> 愼蒼健「日本漢方医学における自画像の形成と展開」『昭和前期の科学思想史』勁草書房、311-340頁。

<sup>3</sup> 橋田邦彦「医道」東京大学医学部生理学同窓会編『生体の全機性』協同医書出版社、1977年、247頁。

<sup>4</sup> 橋田邦彦「生理学と医学」、前掲書、100頁。

<sup>5</sup> 橋田邦彦、前掲論文、128頁。

度の統一ならば、日本人がやらなくてもよいと考える。そして、「その統一を統一として作り上げる者は誰であるか、その作り上げたものは誰がこれを使うのかということを考えて見なければならぬということが問題」であると指摘する<sup>6</sup>。いかにも、「橋田らしい問いかけ」である。この問いの答えは、「日本人」であった。つまり、西洋医学と東洋医学の統一に日本人として自覚が織り込まれた時、「学術道一如」としての、生きた、学問・日本医学が生まれ、それが抽象化されたとき「世界医学」となるという論理であった。ここでも日本医学=具体、世界医学=抽象という往復運動論が展開されている。

### (3) 神経生理学論争の一般的経過

論争の発端は、1923年4月に九州帝国大学で開催された第2回大日本生理学会である。慶應義塾医学部教授の加藤元一が不減衰説を主張し、加藤研究室メンバーはその実験的根拠を発表した。この当時、麻酔をかけた部位における神経伝導は次第に減衰していくというフェアヴォルン (Max Verworn, 1863-1921) の説、つまり減衰説が広く受け入れられていた。別の言葉にすれば、麻酔部位では悉無律 all-or-none principle が成立しないというものであった。加藤の恩師である京都帝国大学医学部教授の石川日出鶴丸はフェアヴォルンの下で学んでおり、恩師の学説に異を唱えた加藤に強い反感を覚えたのではないかと言われている<sup>7</sup>。石川の猛烈な怒りに戸惑った加藤たち慶應の研究者たちは、失意の中で東京に帰った。

論争の当初、東大と京大の生理学教室は、神経生理学を専門とする橋田と石川が教授として研究室を率いていた。加藤、浦本、中西は京都帝大の同期生 (1916年11月卒業) であり、減衰説を唱えるフェアヴォルンを師と仰ぐ石川の下で生理学を学んだ。しかし、加藤は欧米視察から帰国後の1922年の冬から翌年の春にかけて、加藤研究室のメンバーに命じた実験結果から不減衰説へと理論転換をしていく。そして、23年の第2回大日本生理学会にて慶應は18件の発表を行い、加藤は初めて不減衰説を発表したのである。京大・石川研究室は加藤、浦本、中西を輩出するが、加藤は不減衰説を主張して石川と対立したのである。

減衰説と非減衰説の対立は、「非正常な」神経の場合に発生する。正常と非正常の境界がどこなのかという問題も重要だが、ここでは加藤の図式を用いて、「非正常な」神経における減衰説と非減衰説の違いを、興奮強度、興奮速度、悉無律に分けて描くことにする。

表1 減衰説と非減衰説の違い

	減衰説	非減衰説
興奮強度	伝導に際して強度は減衰を受ける。	強度は麻酔部位で小さくなるが、伝導に連れて漸減しない。つまり減衰を受けない。
興奮速度	伝導に際して速度は減衰を受ける。	速度は麻酔部位で小さくなるが、伝導に連れて漸減しない。つまり減衰を受けない。
悉無律	麻酔部位は悉無律に従わない。	麻酔部位も悉無律に従う。

加藤が学会直後に発表した説明によれば、1923年の段階では麻酔部位において減衰がないという主張は、興奮強度と興奮速度に関する実験によって検証された。一つは牧亮吉と久保盛徳<sup>8</sup>が導き出した「興奮の大きさは麻酔部位で減衰を得ない」という実験結果である。そしてもう一つは、大塚藤吉の「伝導速度も減衰を得ない」という結果であった<sup>9</sup>。

しかし、実際に繰り上げられた論戦を単純な対立図式「京大 vs 慶大」で描くことはできない。この論争を通じて京大、慶應大に匹敵する数の研究報告を行なったのは東京慈恵会医科大学である。慈恵医大教授の浦本は加藤と京大時代の同期生であり、彼は恩師・石川と同期生・加藤の論争を緩和したいと考えていたようである<sup>10</sup>。一方、浦本と京大・石川との間にも緊張関係が見られる。1927年の学会にて石川が提出した新減衰説<sup>11</sup>に対して浦本は明確に否定的な意見を述べ<sup>12</sup>、減衰説と非減衰説の二者択一でない立場を模索している。また、1928年には慈恵医大は助手を慶應大と京大の生理学教室に派遣し、それぞれの実験の術式を習い、両者に対する「批判実験」を試みている<sup>13</sup>。慈恵医大はその後も批判実験を展開し、1932年の第11回学会 (新潟医大) では、慶應大と慈恵医大との間で激しい論争が行われた。

<sup>6</sup> 橋田邦彦「医道」、前掲書、226-227頁。

<sup>7</sup> 岡本拓司『科学と社会』サイエンス社、2014年、149-153頁。

<sup>8</sup> 久保盛徳 (1893-1968) は1917年11月に京都帝国大学医学部卒業。石川門下であったが、後に加藤の慶應義塾大学医学部で助教授、教授を務め、不減衰説の立証で大きな貢献をした。

<sup>9</sup> 加藤元一「神経興奮伝導に関する余等が新学説」『日本之医界』第13巻第41号、1923年、8-11頁。

<sup>10</sup> 「東京慈恵会医科大学生理学教室史」、406-407頁。

<sup>11</sup> 1926年10月から1927年2月にかけて発表された。

<sup>12</sup> 第7回の生理学会にて、京城帝大・大塚研究室の李甲洙は浦本に対して、石川の新学説を認めるのかと問い、浦本は「認めません」と回答した (『醫海時報』1757号、1928年4月、26頁)。

<sup>13</sup> 東京慈恵会医科大学の学術雑誌『成醫會雑誌』の第508号 (第47巻第6号、1928年6月)、第510号 (第47巻第8号、1928年8月)、第511号 (第47巻第9号、1928年9月) に掲載された。

京大と慶大の2大陣営による減衰・不減衰論争という図式は、京大・石川自身が1926年にフェルヴォルン学説と加藤学説をともに否定する新減衰説を提示して複雑化し、慈恵医大は京大陣営から離脱して、1929年になると東大の橋田邦彦とともに悉無律の相対化へと向かっていく。慈恵医大の浦本と内山孝一は、東大・橋田の研究によって悉無律は1929年に「崩潰」し、「神経に関する減衰、不減衰両伝搬学説は新しい光の下に見直さねばならなくなった」と述べている<sup>14</sup>。私が問題にしたいのは、悉無律が実際に崩壊したかどうかではない。神経生理学論争的の麻酔経過中の興奮伝導についてであったが、橋田が目していたのは正常の神経繊維、骨格筋繊維、心筋繊維について悉無律が成立するかいなかという根本的な問題であった<sup>15</sup>。

ここで私が注目する歴史的事実は、この浦本と橋田の共同戦線に加藤門下の京城帝大の大塚藤吉チームが合流したことである。慈恵医大の浦本門下である内山孝一(1898-1978)は、1930年に慶應大学が単一筋繊維および単一神経繊維の摘出に成功した後、1931年に悉無律問題に対する整理を行った。その中で取り上げられた主要な人物は、東大の橋田、京大の石川、慶應大学の加藤、慈恵医大の浦本、そして京城帝大の大塚であった。そして、橋田、浦本、大塚を加藤・石川論争の批判者として、さらに悉無律疑念・否定派として整理している<sup>16</sup>。敗戦後の1956年、慈恵会医科大学の名誉教授となった浦本は、過去半世紀の日本生理学界を回顧する文章の中で<sup>17</sup>、第10回学会にて「京城大塚教室から悉無法則に対する新しい疑義を提出した批判が出た年だった」と回顧している。

#### (4) 京城帝大・大塚藤吉の科学主義的態度

大塚藤吉は1919年5月に長崎医学専門学校を卒業後、1921年に慶應義塾大学医学部生理学教室に入室した。総動員体制の加藤研究室において、大塚は「神経の興奮伝導速度」というテーマを与えられ、不減衰説を証明する実験を行った。1924年1月に朝鮮へ渡り、京城医学専門学校の教員嘱託となり、ドイツに留学。1926年1月に慶應義塾大学医学部にて博士号を取得した後、京城帝国大学医学部に教授として着任する。

京城帝大・大塚研究室は、1927年の第6回大日本生理学会にて初めて発表を行う。1928年の第7回学会では計6題の発表を行うが、まるで慶應チームの一員であるかのように加藤説を擁護する報告を行なった<sup>18</sup>。しかし、1928年初頭から開始した李甲洙と春田丑雄の実験から、大塚は加藤擁護論から離れていくことになる。大塚研究室はその実験結果を1929年の第8回学会(北海道帝国大学)から公表していく。そして、1929年の9月に「悉無律ニ対スル疑義(其一)」を発表、李と春田の実験結果から減衰及び不減衰伝導学説の「論争の基礎であるところの所謂悉無律なるものの存在に向かつて疑義を挟まなければならない状態になった」と言うことを報告する<sup>19</sup>と述べたのである。先述した通り、減衰説も不減衰説も、悉無律の存在を前提としており、正常神経の3大法則は共有している。しかし、大塚は李と春田の実験的研究から、心筋並びに骨格筋において正常時においても悉無律が適用できないと考えるようになったのである。大塚は第8回学会における橋田邦彦と浦本政三郎の実験研究から大いに刺激を受けていることを表明しているが、1929年に東大・橋田、慈恵医大・浦本、京城帝大・大塚が悉無律への疑義、その相対化へ向かっていったことは明らかである。その後、「悉無律に対する疑義」は、『日新醫學』で3回に分けて1933年まで継続した。

1933年の大塚の言葉によれば、この論争は日本だけでなく欧米の生理学界も巻き込み、10年以上も続いている。日本では石川、加藤、浦本たちが実験を再三反復し、その実験結果に立脚して議論しているにもかかわらず、論争は収束しない。その理由の一つとして、「従来の諸家はフェルヴォルンの減衰説の真の意味を誤解している」と指摘する。不減衰説の加藤・林は、フェルヴォルン説を「正常なる状態において悉無律に従う生活体、例えば神経繊維は麻酔薬作用の瞬間から悉無律に従わなくなる、すなわち減衰伝導をするのである」と考えている。しかし、この読解はフェルヴォルン説に対する重大な誤解である。フェルヴォルンの論文では「興奮性がある一定程度まで低下すれば」減衰伝搬をすと述べており、従来これを批判した諸家のように「麻酔薬を作用させれば常に必ず」と言っているのではない。大塚はフェルヴォルン説を修正すれば、「第三の新しい考え方」が生まれるのではないかと提案するのであった。

<sup>14</sup> 浦本政三郎・内山孝一「昭和4年度に於ける日本生理学界の概観」『日本之醫界』第20巻第2号、1930年1月、14-17頁。

<sup>15</sup> この点は内山孝一も強調している。内山孝一「橋田邦彦先生と悉無法則の問題」東京大学医学部生理学同窓会編『追憶の橋田邦彦』鷹書房、1976年、170-171頁。

<sup>16</sup> 内山孝一「悉無法則の問題」『成醫會雜誌』第540号(第50巻第2号)、1931年、165-194頁。

<sup>17</sup> 浦本政三郎「過去半世紀の日本生理学界の回顧と展望」日新医学協会編『日本医学の発達』日新医学社、1955年、48頁。

<sup>18</sup> 第7回大日本生理学会の様子は、『醫海時報』(1757号、1928年4月、721-722頁)に詳しい。

<sup>19</sup> 『日新醫學』第19年第1号、1929年9月、36頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 慎蒼健	4. 巻 49-8
2. 論文標題 医学論の日本主義的展開：戦時期日本の生理学、臨床医学、漢方医学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 199-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 慎蒼健	4. 巻 1007
2. 論文標題 コメント2（<近代史部会>「科学」を問いなおすー福祉・衛生の実践の場から）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 115-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 慎蒼健
2. 発表標題 Development of Post-"Nippon-Igaku": Scattering of "Japanese Medicine"
3. 学会等名 The PNU Global Cooperative Research Program: The Formation of the East Asian Science Diplomacy Network・ The Trans-Asian History of Science, Medicine, and the Environment in South Korea and Japan（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 慎蒼健
2. 発表標題 [Keynote Speech] Characteristics of Ginseng Research in Colonial Korea:Relationship between the Japanese Government-General of Korea,Mitsui&CO.,LTD.and the Pharmacology Class of Keijo Imperial University
3. 学会等名 2023 JBNU KRISTaC International Conference/ From Hygiene to Public Health:Construction of modern bodies and health system in East Asia（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 塚原東吾、慎蒼健、Kjell Ericaon、ヒロミ・ミズノ、Tae-Ho Kim、藤原辰史、山根伸洋
2. 発表標題 アロン・モーアの見たもの、遺したもの
3. 学会等名 日本科学史学会・第68回年会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 慎蒼健
2. 発表標題 コメント (<近代史部会>「科学」を問いなおすー福祉・衛生の実践の場から)
3. 学会等名 歴史学研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 SHIN Chang-Geon
2. 発表標題 Colonial Development of Medical Controversy: Focusing on Neurophysiological Research in Colonial Korea
3. 学会等名 the 16th International Conference on the History of Science in East Asia (16th ICHSEA 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 慎蒼健 他約170名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 726
3. 書名 科学史事典	

1. 著者名 慎蒼健	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 541
3. 書名 外地「いのち」の資料集(一)：「朝鮮総督府医院年俸」第一巻	

1. 著者名 慎蒼健	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 182
3. 書名 外地「いのち」の資料集(一)：「朝鮮総督府医院年俸」第四巻	

1. 著者名 慎蒼健 他多数	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 225
3. 書名 よくわかる 現代科学技術史・STS	

1. 著者名 慎蒼健	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 198
3. 書名 『外地「いのち」の資料集(一) 「朝鮮総督府医院年報」附「朝鮮医育史」』別巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------